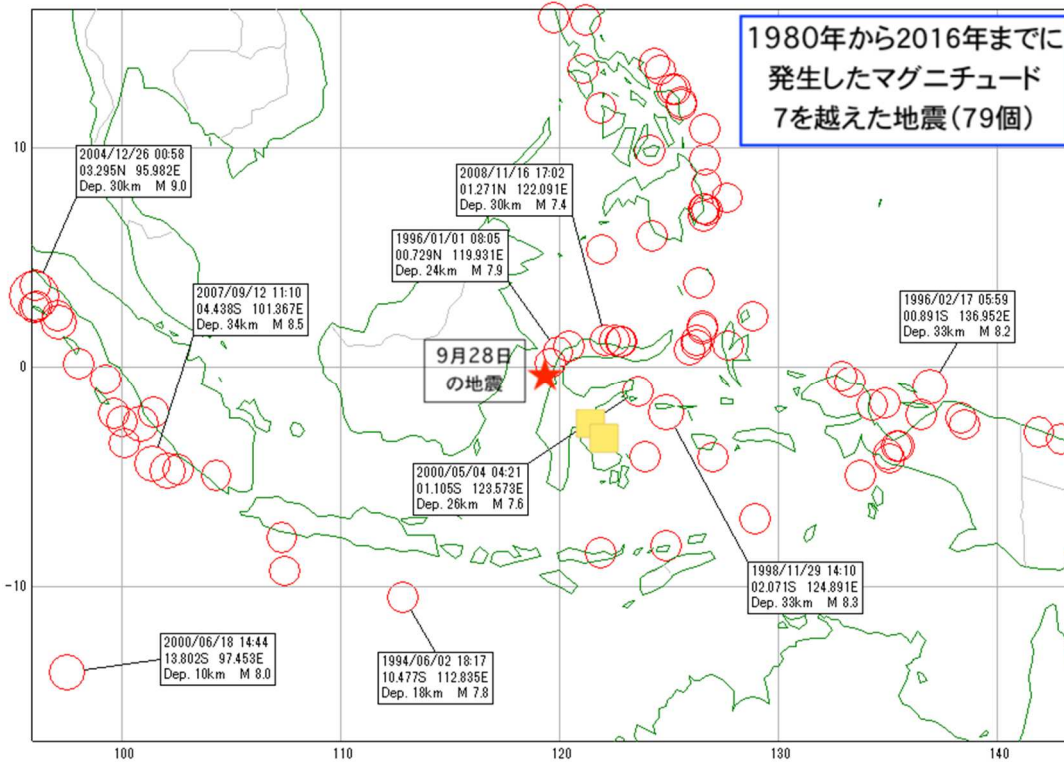




インドネシアで津波を伴う地震が発生

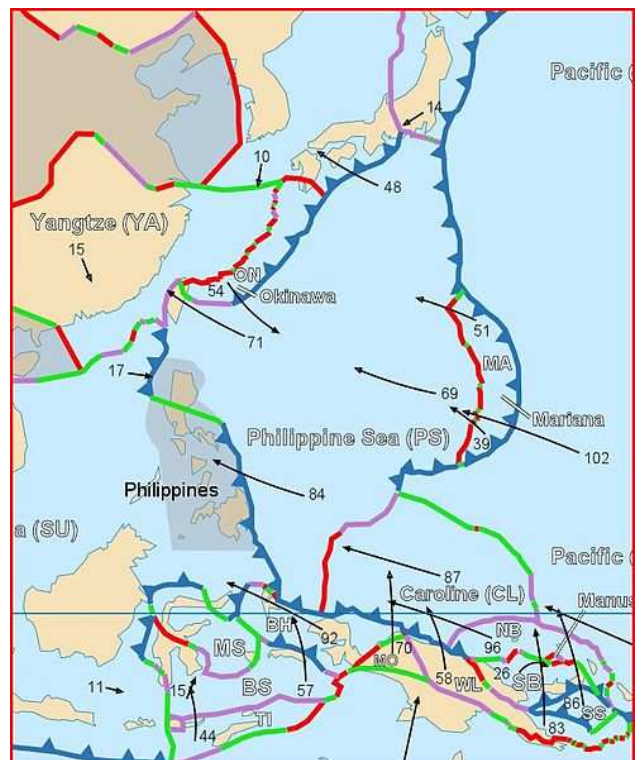
9月28日、インドネシアの Sulawesi (スラウェシ) 島付近でマグニチュード7.5の地震が発生し、それに伴う津波が Palu などを襲い、確認されているだけで死者は380名以上と報告されています。スラウェシ島周辺は過去にも比較的規模の大きな地震が繰り返し発生してきた地域です。



インドネシア周辺は日本周辺にも負けないほどプレート境界(マイクロプレート境界)が集中しており、複雑な地殻構造となっています。右の図は英語版 Wikipedia から転載したのですが、いかに複雑な構造(テクトニクス)となっているかがおわかりになるかと思います。

特にスラウェシ島周辺やニューギニア島周辺では構造境界が多数存在しており、それが活発な地震活動の原因となっているのです。

今回の地震では、地震の規模の割に大きな津波が報告されています。津波の規模は地震の大きさだけでなく、海底地形などにより、どこまで津波が遡上してくるかが被害予測には重要となります。





草津白根山の噴火警戒レベルが再び引き上げられました

9月21日、気象庁は草津白根山（白根山（湯釜付近））では、地震活動が低調な状態となるなど火山活動が静穏時の状態に戻る傾向がみられていることから、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

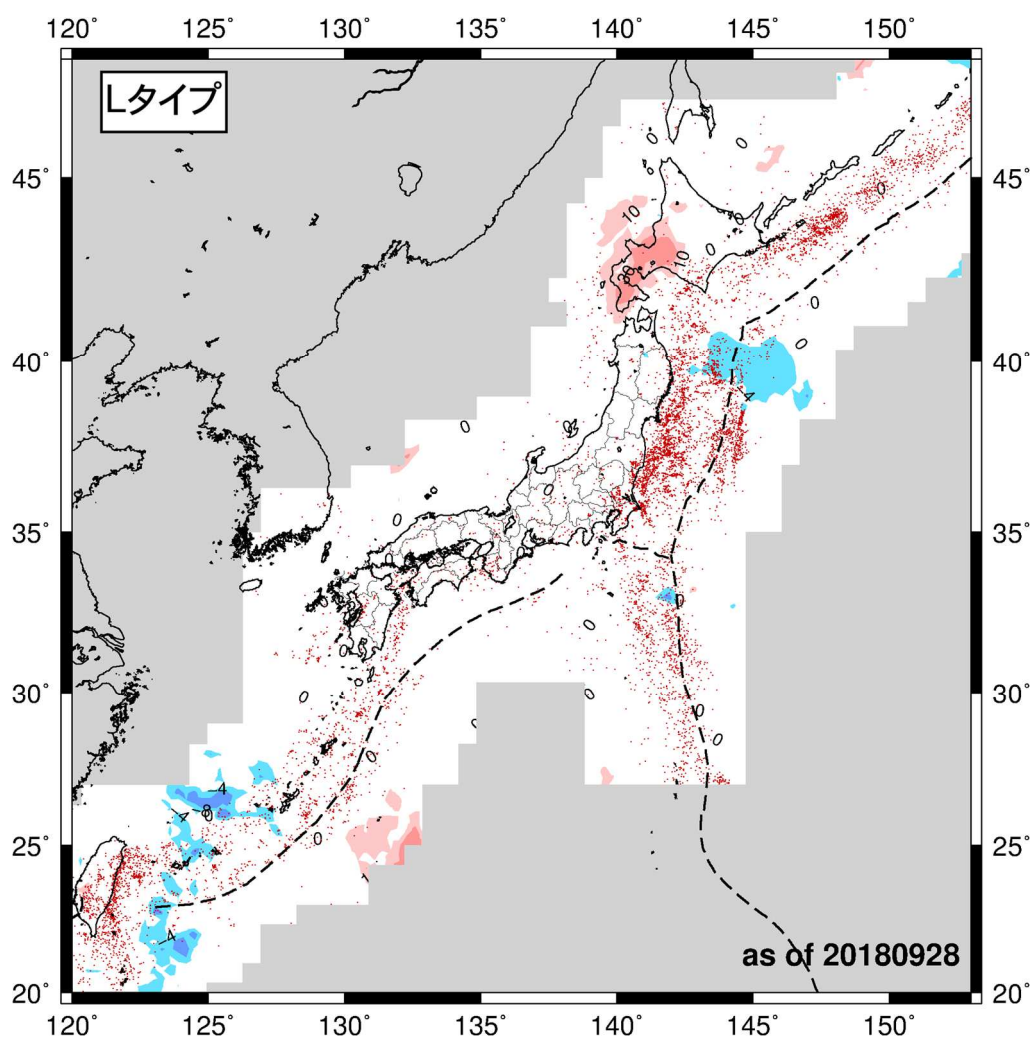
ところが28日夕方から、湯釜付近を震源とする火山性地震が増加している事がわかり、同日噴火警戒レベルを再び2に引き上げました。今後、小規模な噴火が発生する可能性が高くなったと考えられます。秋の観光シーズンに向けて、皆様も最新の情報を入手するようお願い致します。

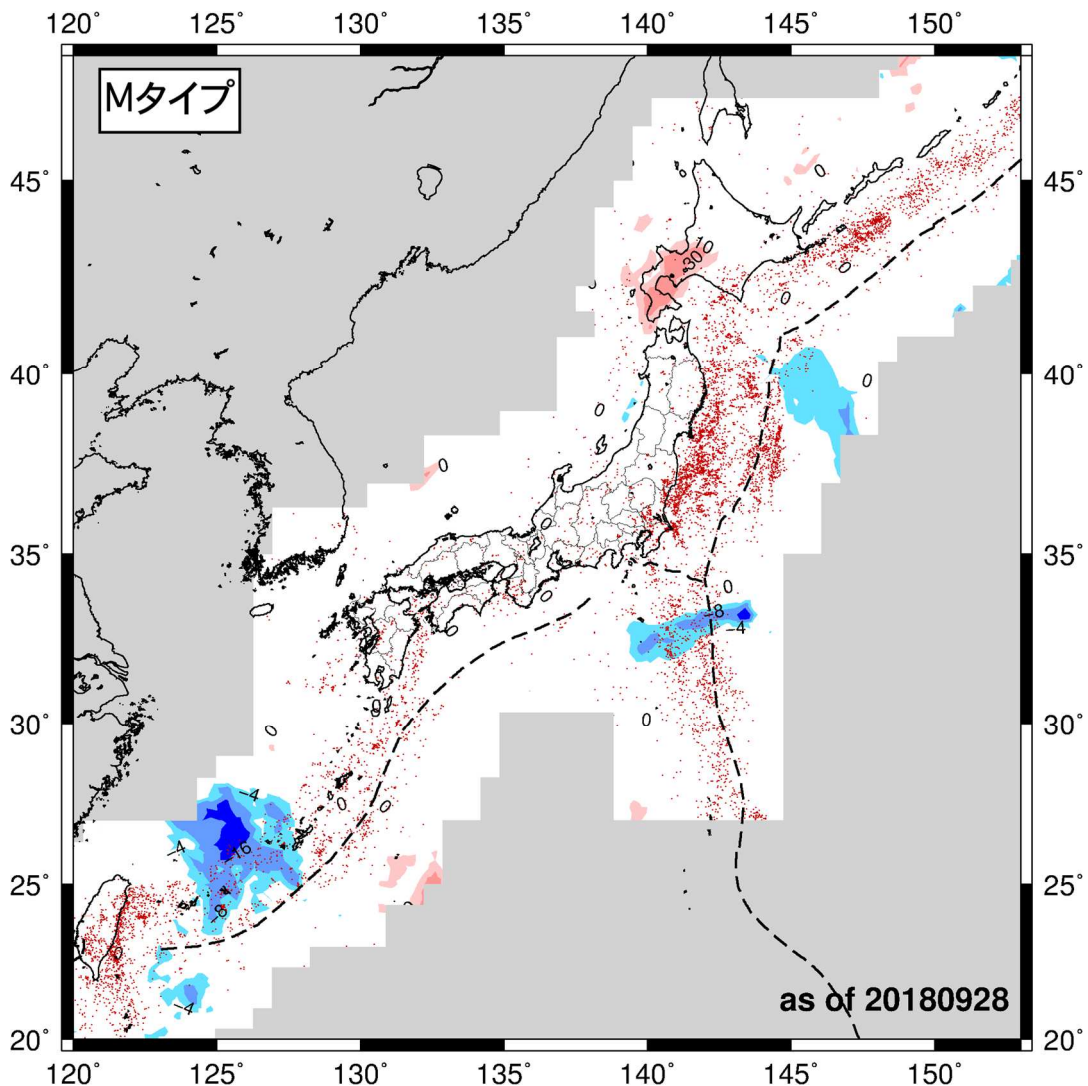
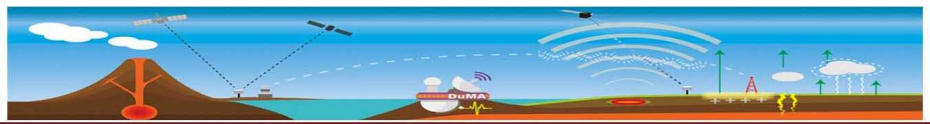
日本およびその周辺の広域地下天気図[®]

今週は現在の気象庁の観測網で解析できる最大範囲の領域の解析です。また解析期間は2011年の東日本大震災以降の7年半ほどのデータを使っています。

これは東日本大震災という超巨大地震のため、この震災を境に日本列島全体の地震活動の特徴が大きく変化してしまったためです(特に東北・関東地方)。

今回は9月28日時点の Lタイプ および Mタイプ の地下天気図をお示します。





8月20日のニュースレターではLタイプのみをお示ししましたが、8月20日のニュースレターから大きく変化したのは、北海道・胆振東部の地震に伴い、北海道西部での地震活動が活発化している事です（図中の赤い領域）。また南西諸島での静穏化（青い領域）も2種類の地下天気図で確認できます。

今週の地下天気図解析から、陸域で一番注意しなければならない地域はやはり関西地方（特に紀伊半島）かと思われます。これは、それまで紀伊半島を中心に広がっていた地震活動静穏化の異常がLタイプでもMタイプでも消失したという解析結果を解釈したものです。

もちろん地下天気図の予測が100%正しいという事はありませんので、一つの参考情報とお考え下さい。